



第24号(2022年冬号)

発行日 2022年2月4日

信州大学教職支援センター

Shinshu University
Center for the Teaching Profession

教職支援センター ニュースレター

巻頭言

「探究県」長野の探究に向けて

長野県教育委員会の要請を受けて、第4次長野県教育振興基本計画の策定に関わる有識者懇談会に参画する機会を得ました。初回会合の席上、僭越ながら次のような課題意識を述べさせていただきました。

第1は、教育振興基本計画の基本コンセプトに関してです。「教育」から「学び」へのパラダイム・シフトが指摘される中で、「信州教育の伝統」という観点からも、また近年謳われている「学びのスタイルの革新」という観点からも、「探究県」というフレーズを活用し、その実質化を図る条件整備を推進していくことを提案させていただきました。

第2は、「学習環境」のデザインに関して、誰の視点に立った学習環境をデザインしていくのかという論点です。多様な子どもの育ちと学びを支えるインクルーシブな教育体制の構築の必要性が指摘されて久しいですが、インクルーシブとは「特別支援教育」に限定した狭義のものではありません。全ての子どもがより良い未来を展望できる機会を保障していくためにも、不登校は問題なのか、発達障害は問題なのかという本質的な議論を踏まえながら、子どもの幸福感や自己肯定感に焦点を当てた支援体制を構築していく必要があります。特に、義務標準法改正を通じた少人数学級政策が年次進行で全国実施されていますが、この動向は長野県の35人学級の優位性が失われていくプロセスとしても捉えることができます。今後、30人学級も含め学級規模を縮小する施策を講じるのか、教員配置の改善や多様な専門スタッフの拡充等に力点を置くのか、あるいは、その両方を推進していくのか、政策選択の重要な分岐点にあります。この他、高校段階の特別支援教育の充実が急務です。合理的配慮を必要とする生徒の増加に伴って、特別支援学校の高等部や分教室、通級指導の拡充等も図っていくことが肝要です。

第3は、「職場環境」のデザインに関してです。教育関係者の多忙化は深刻であり、働き方改革なくして創造性を育む教育の実現は不可能です。働きがいもあって、働きやすい職場をどう創造していくか、教育関係者の職場環境の再構築は、教員養成や教員採用のあり方とも連動するテーマであることは言うまでもありません。

第4は、「教師の学び」のデザインに関してです。今後の学びの中核に「探究」を位置付ける場合、生業としての教師の職能成長の仕組みの再構築は不可避です。全国的に「教員不足」が顕在化していますが、教職一般の魅力を単にPRするだけでは、もはや教員免許状所有者の琴線には触れません。多様な働き方(時差勤務、時短勤務、在宅勤務など)の保障や県独自の処遇制度の整備、キャリアステージに応じた専門性と資質・能力を下支えする現職教員の研修制度の充実など、教師としての成長を後押しする多様な機会を充実させていく必要があると考えています。同時に、学校組織マネジメントの一翼を担う学校事務職員の研修体系の制度化も忘れてはなりません。

課題意識等を共有してくださる方はご一報いただき、多様なアイデアをお寄せください。微力ながら尽力していきたく思います。

荒井英治郎 (教職支援センター 准教授)



初級CST認定試験を振り返って

CST(Core Science Teacher)とは、学校現場での理科教育の中核的役割を果たす教員のことで、信州大学は長野県教育委員会と共同で、CST養成を行っています。令和3年12月18日(土)松本キャンパスにおいて、令和3年度の初級CST認定に向けての専門学部の学生を対象とした修了審査会を長野県教育委員会と共同で実施し、本年度は9名の学生が修了審査にチャレンジしました。

【松浦 匠さん：理学部】

CST審査会での模擬授業を通して、自分が行いたい理想の授業を15分間で伝えることの難しさを知った。実際の授業では、生徒たちが今までの授業の流れやプリント等の資料を見返すことによって、本授業の目的や意義を理解しやすくなっていたが、初めて本授業に触れる人にとっても分かりやすい授業とすることは重要であり、難しいことであると実感した。また、「仕事率」のイメージが教員と生徒で異なっており、電力換算した際の表現を「～回」とするか「～倍」とするかで伝わり方が変わることにも留意して授業を構成する必要があると感じた。審査会で頂いたコメントやアドバイスを参考に、生徒が主体となる授業デザイン力を身に付けていきたいと思った。また、CST講座を履修する上の様々な経験は、今後の自分の生活や考え方に生きてくるのではないかと感じた。



【川島 広さん：理学部】

CST審査会での模擬授業にて、貴重な体験をさせていただきありがとうございました。とてもタメになる機会だったと思います。反省は多く、模擬授業内で、生徒と共に考え授業を組み立てていくことが欠けていること、また理解力の高い子たちのクラスでは適切ではないこと、など審査員の方々からの指摘に深く考えさせられました。また他の学生の模擬授業も面白く新鮮で、自分だったらどう教えるだろうかなどと考え、ただただ感心していました。特に生物分野や地学分野は高校で受講してなかったため、そうやって教えるんだと勉強になりました。

みんなすごいなあと思い、自分と比較して聞いていましたが、審査会后、参加者と少し話した時に私自身の教え方などを褒めてもらい、嬉しい気持ちになりました。私は一度一般企業に入りその後教員になろうと考えていますが、この模擬授業の経験をその時にしっかり活かせるようこれからも学んでいこうと思います。

【鈴木 未希さん：理学部】

審査員の方々の質疑を通して、生徒へのフォローが足りない授業になってしまったと感じました。模擬授業では実際に行った授業を使用したのですが、解説に時間をかけない授業の進め方を意識しました。その理由は生徒観として議論を活発に行うことができることと、教師が話している時間は生徒の思考を停止させる時間にもなるという考えからです。しかしこのような進め方に対して「置いて行かれる生徒がいるのではないか」「生徒が焦ってしまうのではないか」という意見をいただきました。確かに数人、思考の開始が少しゆっくりな生徒や、聞いたことを整理するのに時間のかかる生徒もおり、そのフォローは足りなかったかもしれません。大勢が楽しく集中力を切らさせない授業展開を意識しスピード感を重視することと、少しゆっくりな生徒へのフォローを両立させることは難しく、しかし重要な点であると強く感じました。



【鈴木 海都さん：農学部】

今回のCST審査会の反省として、一番大きくあげられることは目の前にいる生徒(役)が、私が実際に担当した生徒とは大きくかけ離れていて予想される反応について考えることがかなわなかった点だと考える。私の担当した学級は中学1年生だったため、どの生徒も活発的に、間違っているかもしれないという考え無しに答えを言ってくれていた。授業概要を伝える所は比較的うまくいったのではと考えてはいるが、今回の模擬授業はそういったところで少し動揺してしまった為、自分が行おうと考えている授業の100%が見せられなかったなど感じる。後半の発表者の中に、生徒はこういう反応をしますなどと言ってそのまま授業を進めていたので私の考えが単純に足りなかったのかなと思う。しかし、今回のCST審査会ではとても多くの、自分が考えもつかなかった授業にあふれており、とても有意義であった。実際に自分が教員になった後、彼らともう一度会えたらとてもうれしい。



【吉池 葵さん：農学部】

概ね予定通りの授業はできましたが、緊張すると言葉が震え、うまく口が回らなくなる、緩急や強弱がうまくつけられなくなるといった点はなかなか直らないので意識をし続けたいと感じました。

他の先生方からお言葉を頂き改めて考えたのはその授業で何を生徒たちに残したいかということです。「その授業を考えた理由は？」や「他の学習問題を考えなかった？」「最終的にどんな回答を求めているの？」全てその点を突き詰めるための質問だったと思います。この授業を組み込んだ目的は発表会後も変わりませんが、その目標に到達するまでの道筋。とりわけ学習問題、課題の据え方や最終的な結論のモデルなどは熟考する必要があると改めて学ぶことができました。授業を作るということはあるものの一部分を切り取り、理解のきっかけにする物だと感じました。生徒たちとの対話の中でさまざまな切り口に対応できるよう分野への根本的な理解も大切にしたいです。



【堀 礼人さん：農学部】

模擬授業では初めに全体の流れを話し、その後、実際に冒頭から授業を行った。全体の概説では自分の行った教育実習での話はしなかったのが背景が弱かったと考えられる。授業では、想定よりも導入で時間を使ってしまったので、ほぼ復習の場面で模擬授業を終えてしまった。また、指導案の時間通りにはならなかった。そのため、グループワークの実演を行うことは出来なかったのが、何を伝えたいのか分からないモノになったと考えられる。

【西村 奈津さん：繊維学部】

研究授業の時よりも緊張しました。自分が思っていたよりも時間が過ぎるのが早かったです。私の実習先では導入の部分に時間を多くかけていたのですが、CST修了講座で15分という短さではなかなか時間がさげなかったです。実際に皆さんに実験を見てもらい予想してもらいたかったのが導入を大幅に削りました。しかし、教育実習中では導入に時間をかけていたため上手な削り方が分からず慌ててしまい結局時間をかけて考えたところを削ってしまいました。1回でも削ったバージョンでリハーサルをしてから授業に臨めばよかったです。実際の本番よりも、生徒観やその場の雰囲気分からないまま授業するのは少し怖かったです。教育実習中の方が、3週間弱交流してきた生徒たちと指導教官の先生でアットホームな感じでした。また、私は教育実習事後演習にほとんど参加できなかったためフィードバックを個人でしておくべきだったなと感じました。



【三池 杏実さん：繊維学部】

審査員の方からの「その活動の必要性は」という言葉が強く印象に残っている。

研究授業は担当教諭以外の教諭が見学に来るという点から他の授業実習よりも見栄えのする授業構成であることが望まれることがあり、少なくとも私の場合では指導教諭に何についての実験がしたいのかまず尋ねられた。模擬授業でも幾多の活動を見ることができた。しかし、活動をなぜ取り入れなくてはならないのか、ということまでは考えていなかった。活動のみならず授業プリントにおいても用語を書き込ませて終わりにするのか、モデル図を描かせるのかなど、構成は多岐にわたる。考え始めると終わりがなくなるためにいつの間にか考えないようにしていたそれでないといけない理由というのを今一度考えてみるのもいいのかもしれない。

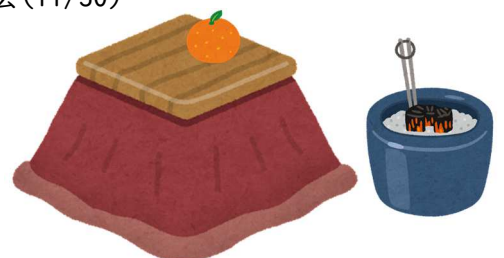
【大西 規裕さん：繊維学部】

授業全体の構成を説明した後、実際にやってみたときに問題点として挙げられた点と改善点を説明しようとしたが、展開が多かったため伝わりづらかった。先に板書を書いておくことやそのデータを写真として保存しておくことで時間に無駄なく進行できたのではないかと思う。また、伝えたいことが多数ある中でも自分が焦点を置いた部分のみを話しても良かった。実際、喋る早さを指摘されたが、それを予防するためにも余裕を持った計画を立てるべきであった。

内容を伝えるにあたって、実際の様子を見ていないと細かな授業の流れは相手方には伝わりにくい。まして、今回のように実験がないことに加え、オリジナルで問題を作成してみるとなおさらわかりづらくなる。今後、同様の機会があれば以上のことを注意して臨んでいきたいと思う。

教職支援センター11～2月の動き

- 農学部と近隣教育委員会・協力校等と教育実習等にかかわる懇談会(11/30)
- 教員免許更新支援センター会議 (12/3～8)【メール審議】
- 教員免許更新支援センター運営委員会(12/8～14)【メール審議】
- 松本附属学校園との打合せ(1/24)
- 長野市教育委員会と連携協議会(1/27)【書面議決】
- 教職教育委員会(1/11～14)【メール審議】
- 教職セミナー(2月上旬)【オンデマンド】



先日、ある中学校の研究主任の先生から、「今年は『教えることからの脱却』という研究テーマで進めてきましたが、ベテランの先生ほど授業スタイル（チョーク&トーク）を変えることができず、学校全体で改善していこうという雰囲気になりません。何かよい方策はありますか？」といったご意見をいただきました。

私は、「ある小学校では、授業における子どもと教師の発話量が7対3となるよう、『7対3運動』を研究主任の先生が提案し、自分の授業を見てもらう時間を設けるなど、お互いの授業を見合いながら、授業改善を進めています。授業改善を進めようとしている先生の輪を広げていくことが大事になります」と伝えました。

11月下旬に行った教職実践演習では、「教師が何を教えるか」という授業から「子どもが何ができるようになるか」という授業へ、学びの質の転換が求められていることを学生の皆さんに再認識してもらいたいと願い、模擬授業を子ども目線で視聴し、意見交換をしました。近くの仲間と思ったことを率直に伝え合う学生の姿を見て、頼もしいと感じました。また、学生から、「授業の在り方について、再認識させられるよい演習となった。生徒の主体性や生徒が考えをもつこと、教師は答えを教える人ではないことなど、重要なことを学べた。生徒の反応をしっかりとみることを大事に授業していきたい』『なぜ』『どうして』『どういうこと』といった子どもの言葉に一步踏み込んで反応を引き出すような発問をし、教師が潤滑油としての立ち回りをすることは、主体的な学習をするうえでとても大切なことであると感じた」「自分が教育実習でやった授業に、さらに課題が見つかった。自分が教員になったら、常によいところを伸ばしつつ、よくできる点をどんどん改善して行って、授業が生徒にとって充実するものにしていきたい」といった感想をいただきました。私自身「学生の皆さんと一緒に授業改善を進めたいな」と強く感じました。

子どもは本来、「あれ？」「どうして？」「知りたい」「やってみよう」という知的探求心をもっていきます。その「問い」が連続していくことで学びが深まり、子どもたちが資質・能力を育成していくことにつながります。子どもの声に耳を傾けながら、子どもたちが「学ばって面白い！」と感じられる授業をまた一緒に考えていけたらと思います。

（松本市教育委員会 学校教育課 学校支援センター 指導主事 合内 誠宣）



編集後記

今号では、偶然「巻頭言」と4ページ目の「教職実践演習」へのご感想がリンクする内容となりました。授業内の先生と学生との対話が今後の授業改革につながっていくのかもしれない…とワクワクさせられます。2・3ページ目では、未来のCSTの気づきや反省、喜びの声を掲載しています。ぜひご覧ください。（広報担当 河野桃子）

